

旧古井家住宅（千年家） 音声案内のテキスト

第1地点 旧古井家住宅の概要と国宝としての価値

こんにちは。ようこそ、旧古井家住宅へ。

ここでは、この家の概要についてご紹介します。

旧古井家住宅は、姫路市北西部の山間にある、安富町皆河に建っています。林田川の西岸にある高台で、周辺の道や集落の様子を見渡すことができる場所にあります。

この住宅が建てられたのは、今からおよそ 550 年前。室町時代の中頃から後半にあたる、15 世紀頃と考えられています。現在まで残る日本の民家の中でも、最も古いものの一つです。

古井家は、中世に荘園の名主を務めた、有力百姓の家系であったとみられます。

この住宅は、古くから、災いのない「無災の千年家」と呼ばれてきました。江戸時代には、近くで2度、火災がありました。しかし、近所の家や竹林は焼けたにもかかわらず、この家は無事だったと記録されています。

こうした出来事から、この住宅は「無災の千年家」として、地域の人々に語り継がれてきました。

この建物は、ただ古いということだけではありません。室町時代の木材のほか、古い間取りや、当時の住宅を建てる技術がよく残されている点でも、価値が高いのです。

この建物を見ることで、室町時代の民家がどのような技術で建てられ、当時の村の有力者がどのような家で暮らしていたのかを知ることができます。

日本の民家の歴史を考えるうえで、なくてはならない重要な建物であることが高く評価され、国宝指定につながりました。

それでは、次に建物の正面へお進みください。外観の特徴を見てみましょう。

第2地点 建物の正面（外観から見る中世の姿）

ここでは、旧古井家住宅の外観について説明します。

旧古井家住宅は、南向きに建つ木造平屋建ての建物で、中世の民家としては大きなつくりになっています。

まず、屋根に注目してください。

草を用いた茅葺きの大きな屋根は、「入母屋造り」と呼ばれる形式で、軒は人の背丈ほどの高さしかない点も、この建物の特徴です。

屋根のいちばん高い部分を「棟」といいます。棟には、木材をバツ印のように組み合わせた「ミヤクシ」と呼ばれる木組みが7つ、並んでいます。

次に、壁を見てみましょう。外壁は、土を塗った「大壁造り」です。窓や出入り口などの開口部は、小さく、狭く、数も限られており、閉鎖的なつくりになっています。

現在の住宅と比べると、屋根の割合が大きく、どっしりとした姿に見えるのではないのでしょうか。このような形が、中世の民家の姿を伝えているのです。

建物を支える柱や梁にも、中世の技術が残っています。柱などの表面には、昔の職人が木材を手作業で加工した痕跡がみられます。

それでは次に、建物の内部へ進み、「ニワ」と呼ばれる土間について見てみましょう。

第3地点 建物内部の土間（土間で行われた仕事と手斧痕）

ここでは、建物の東側にある、「ニワ」と呼ばれる土間について、ご紹介します。

ニワは、人が出入りする場所であるだけでなく、農作業や道具の手入れ、炊事などを行う作業場として使われていました。旧古井家住宅では、建物の東半分がニワになっていて、とても広い空間となっています。

ニワの南東の角には、仕切りで区切られた「ウマヤ」があります。ここでは、農作業や荷物を運ぶ仕事を手伝う、馬や牛などを飼っていました。

また、ニワの北西には、「クド」と呼ばれるかまどや、流しが設けられていました。ここで煮炊きなどの炊事を行っていました。

このようにニワを見ると、昔の人々が、家の中でどのように働き、生活していたのかが分かります。昔の民家では、現在のように、住む場所と仕事をする場所が完全に分かれていませんでした。家の中で農作業をしたり、道具を使ったり、食事の準備をしたりしていたのです。

次に、柱や梁、板壁の表面に注目してください。この表面に見られる細かな凹凸は、手斧と呼ばれる大工道具で、木材を加工した跡です。機械で加工したものとは異なり、昔の職人が手斧を使って、木材を少しずつ削ったことがわかります。

ニワの中程に建つ柱などには、室町時代の木材が残されています。このほか、江戸時代や、昭和の修理で使われた材料にも、手斧による加工の跡が残っています。

柱や梁をよく見ることで、建物が長い時間をかけて使われ、修理されながら現在まで守られてきたことも感じられます。

次は、居室部の「オモテ」へお上がりください。この家の間取を見てみましょう。

第4地点 オモテ（古い間取りと亀石、家に伝わる話）

ここでは、この家の特徴的な間取りについてご紹介します。

ニワの西側は、家族が生活する居室部分です。表側の広い座敷は「オモテ」と呼び、その奥には「チャノマ」と「ナンド」の2つの部屋があります。

正面側に広い部屋を設ける間取りは、「前座敷型三間取」と呼ばれる古い形式です。江戸時代に広まった田の字型の「四間取」民家につながる古い形式として、重要な意味を持っています。

「オモテ」の正面側に柱が建ち並ぶのも、この家の特徴です。正面の壁とこの柱の間の空間は、江戸時代の民家になると、縁側に変化していきます。

「オモテ」の奥にある「チャノマ」をご覧ください。「チャノマ」には、ニワ側にイロリが設けられています。イロリは、煮炊きや暖房に使われ、家族が集まる場所でもありました。その隣の「ナンド」は、寝室として使われたとみられます。

また、「チャノマ」と「ナンド」の床には、竹を組んだ「簀子（すのこ）」が使われています。一方、

「オモテ」の床や壁には、加工に手間がかかる木の板が使われています。

部屋によって床や壁の材料が異なり、用途に合わせたつくりになっています。

旧古井家住宅には、古い間取りや柱、梁だけでなく、ここで暮らした人々の願いや生活の様子も残されています。建物の形のほか、ここでどのような人々が暮らし、どのような仕事をしていたのかも想像してみてください。

最後に「オモテ」のホコラの前にお進みください。この家の伝承をご紹介します。

第5地点 亀石の前（古井家にまつわる伝承）

最後に、「オモテ」の祠（ホコラ）の中をご覧ください。

ここには、「万年無災の亀石」と呼ばれる石がまつられています。今見えているのは亀石の上部で、床下の見えない部分にも石が続いています。

伝承では、家を建てるときに、裏山から転がり込んできた大石だといいます。

この大石は、家を建てるのに邪魔だったため、2度、林田川に捨てられました。ところが、2回とも夜のうちに戻ってきたため、「万年無災の亀石」として祀るようになったと伝えられています。亀は長寿の象徴でもあります。「いつまでも災いがないように」という願いが、この石に込められていたのかもしれない。

また、古井家にまつわる記録には、天正9年、西暦1581年、羽柴秀吉が「無災の千年家」の話を聞き、この家の古い垂木を姫路城の天守の建築材料に使ったとの伝承が残ります。

このような伝承は、この家が古くから「無災の千年家」として語り継がれてきたことを示しています。

これで、旧古井家住宅の音声ガイドを終わります。最後までお聞きいただき、ありがとうございました。引き続き、室町時代から残るこの家の雰囲気をお楽しみください。

以上